

## 三 回鶻譯として現存せる三種の天地八陽神呪經

以上吐魯番附近の雅兒湖ヤルホより發見せられたる一卷について其の經名と性質とを論述せり、然れども此の經の今日に、殘存するものは、只だ此の一卷のみに止まらず、他にもまた同一のものゝ藏せらるゝあり、即ち明治三十六年等しく大谷伯爵の命によりて新疆の探檢に従事せし堀賢雄氏が、庫車クツチャより得來りたる斷卷一片及び、烏魯木齊ウルムチの露國領事クロトコフ氏が、吐魯番より得て彼得堡に送致せしものは即ち之にして、前者は數個の斷片なりしが、余は辛ふじて之を接合し、連續せる六十餘行を得、後者は三十四行外に同一經卷の十  
二行の斷片ありを存して、ラドロフ氏が前記普門品の末に附録して出版し、バラヂン、イヴノフ兩氏も其の解釋を助けたりしが、たゞ此れが般若部に屬する性質のものなるを知り得たるに止まりて、終に何經なるかを定むる迄には至らざりしなり、而して此等の兩斷片共に橘君の得たる一卷中に含まるゝものにして、今初めて其の名を定め得たるは、實に幸とする處なり、然れども此の三種の經本には、各々多少の異同ありて、悉くは相一致せず、而して其の相違の點は、たゞに書寫の間に生じたる偶然のもののみならず、實に亦た譯述の間に於る異同と認むべきもの所々に存在せり、此のことは甚だ注意すべき現象にして、思ふに漢文のものに既に異同ありたるにもよるべけれども、また譯述者が各々考を異にしたりと認め得べき點少からず、從がつて此の經の翻譯が決して一回に止まらざりしを證明するに足るものなりとす、而してまた其の出土の地方が一は吐魯番にして、一は庫車なることも、此の經典の分布の點より考がふる時は、甚だ重要なことなるべし。從來得られたるものは、もとより既存せしものゝ一部分にすぎざる可きに、其の間既に此の經がかく